
アナアナ。

あゆみかん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アナアナ。

【Nコード】

N6111V

【作者名】

あゆみかん

【あらすじ】

【ホラー／短編】 今日のカレシのゴローとプール。昨日約束したんじゃん。だから、今からその待ち合わせに駅まで向かうんじゃん？ アタシは、穴に落ちてった。マジで！？ 小説家になろう『夏のホラー2011』夏の夜には怪談を『企画参加作品』怖くありません。

(前書き)

ギャル視点ギャル口調ギャルホラー。怖くね
…どっどっ。

暑^{あつ}ー。今日はカレシ（彼氏）のゴローとプール。昨日約束したんじゃない。だから、今からその待ち合わせに駅まで向かうんじゃない？
急いでないけど、携帯電話見ながらで忙しいっつーの。

そうしたらさ、歩いてる途中だったんだけどさ。道のド真ん中にお金、落ちてたんじゃん……。都合いいことにイ、周りは誰もいない、住宅ばかりで人間はアタシひとり。アタシしかない。

アタシ、それと見つめあった。約27秒くらいかなア、アタシはお金を拾おうとした。万札1枚だったけど、誰だっけって見つけたら拾おうとするじゃん。違うワケ？ アタシだって例外じゃないしイ……とにかくさ、拾おうと手を伸ばして前屈みになったワケよ、そうしたら。

フザけんなつてのね、突風が、いきなり奇跡みたいに吹いてさ。すくい上がるみたいに、万札の奴、風で飛んでいっちゃったってワケえ。うっわー、信じらんない！ って呆気にとられたってーか。でも、でも、よ。でもでも。

アタシ、追っかけた。逃げる万札、追っかけるアタシの鬼ごっこ。光景は想像にお任せするけど、アタシは万札のヤローを追うために道の脇から外れて、広がって荒れ放題になっている空き地のボーボーとした草かき分けて、続いていた山道へ入って行った。すぐに戻ってくるつもりで肩からぶら提げていた、水着の入ったバッグを適当にその辺に放り出して、林のなかに潜って行った。何処だ万札、晒せ万札。お姉さん痛いことしないから出てきてよ、ってさア、アタシは見失った万札君を探していた。

それからすぐよお。アタシ、ドジ踏んだ。突然、足元が無くなっ

地面を踏んだつもりだったけど、消えた。足場が無い。アタシは、穴に落ちてった。マジで!?

自分がどうなったのか……ゼーン然わかんない。アタシ、ひよつとしたら死ぬの。まだ16(歳)じゃん……。

気がついてゆっくりと目を開けたら、周囲は暗かった。ひんやりとした壁が体に当たっていて、湿気が気持ち悪いんだけどーもとーいちイ、と暫く所在が分からないせいで頭おかしかった。

アタシ、どうなっちゃったんだろう。まず。

「ちよつとオ……ここ、何処ー?」

擦れたけど、声を出した。頭痺れてる? 起き上がれないじゃん、どうなってるの。

「誰かアー」

もう一度、声を。声は、反響している気がする。狭い所にいるんじゃない? 場所もそうだけど、今が何時で、気絶してから何分だか何時間だか経ったのか、分からない。携帯って持ってきたっけ、バッグのなかだったっけえ?

それより、体が動かない。ヤバくね?

「こんにちは」

「はア!？」

声が出た。アタシ、死ぬほど驚いた、背筋が凍るほど。「ひっ」慌てふためいた、心中で。

「怖がらなくていいよ。オレは許斐いのみといいます。気だけは若いサラリーマンなん」

こんにちはは、に続いて何処かからした声は、陽気そうにアタシに話しかけていた、でも語尾が震えている。「誰だオッサン」アタシはたぶんだけど真っ青になりながら暗いなか、声に声で返した。ユレイだったらどうしようってーの。

「人の話を聞こうね。オレはコノミ、コノミちゃん。安月給だけど建設会社で平日頑張ってます。土日はホリデー、でもカミサンと息子に殴られてます。誰か通報して」

オッサンは冗談を言ってる。何したのか知らねーし笑えないしカミサンと息子にボコられようが何されよーが、アタシには関係ないんじゃない？ それより、オッサン、アンタ何処にいるのさ？ におい嗅いでもオッサン臭の気配は無いし。よく聞いてたら、声ってアタシのすぐそばでしているような気がするんだけどー。どうなってるの？

「君はね、穴に落ちているんだよ。で、ケガはないかい？」

オッサンが聞いてくる。

「穴ア！？ ……やっぱりね」穴に落ちたっぽい所までは思い出せるんだつつうの。

「でも、動けない」

アタシはため息をついた。頭がぼつつとしてる。「ははあ、ケガしてるみたいだね。それで、身動きできないと。そりゃ大変だ」人事みたく言ってるの。

「オッサン、何処にいったよ」

アタシはイライラしながら言った。

「えーっとね。詳しくは端折るけど、要するに。オレも『隣の穴』に落ちたみたいだね」

「はア！？」

「同類ですね。はっはっは。で、君を追いかけてきてあげた親切の拳句にこんな羽目になってしまったオレへ、温かい言葉と毛布はないかい」

「ねえよ！」

アタシは呆れた。

「キツイなあ。もうちょっと優しく言えない？ 女の子でしょ」

「放つとけよオッサン。よけーなお世話」

「君の親はどんなだかね」

「親ア？ ……どーでもいい」

元気よくオッサンに返していたら、急に会話が止まった。何だオッサン、さつきとは逆に、声がしないと気味が悪いじゃん。「君の親御さんは、君に冷たいのかな」待っていたら、オッサンは続けた。「親なんて知らね。親なんて自分のことばっかじゃん？ アタシが外泊しよーと誰と付き合おーと、夜はいいし知りもしないし『知ろうと』しよーもしない」アタシは舌がもつれそうになった。

「親が勝手だからアタシも勝手にすんの。別にいいじゃん。何か悪い？」

アタシの親は両親とも夜はいない。オトンは仕事だろーけど、オカンはさアね。たまに帰ってきてるけど、挨拶だけ交わして、よそよそしいっていうの。避けられてんじゃないのって。避け……あー、アタシの普段の格好、マンバじゃないけどそれに近いからそれかな。今の格好は、プールに行くからってそこまで化粧塗りたくってないし、どー見ても普通の学生じゃん？

だーあれも怒らないんじゃない。だから好き勝手やるんじゃない？

「毎日楽しいかい？」

オッサンは聞いた。

「べつつにイー。楽しい時は楽しいけどー」アタシは眠たくなってきた。

「楽しいとこ悪いけどね、君。君、このままだと死ぬよ」

突如、オッサンが怖いことを言った。は？

「考えてみてごらん。君とオレがここにいることを知っているのは誰もいない。オレが気がついて君を追いかけたのは、立ち入り禁止になってる山に君が入っていくのをたまたま見かけたからだ。禁止になっているのを知っているのは近所の人だけだろうけどね。」

でも、看板が何処かになかったかい？」

「さー……」

「ここも古い所だから、看板は外れて何処かへいつてしまったかもね。まあいい、それより、君はケガをしている。見えないから症状も何も分からないけど、もし骨折でもしていたら熱も出るし、時間が経つと腹も減る。間違ひなく衰弱していくし、助けが来ないと事態はどんどん一方、悪化するさ。さーて、どうするんだ？」オッサンは挑戦的にアタシに言った。「どーすんだって……」

体は動かない。どーもできないじゃん。

「アタシ、死ぬワケ？」

アタシは聞いた。足に違和感っていうか、足が痛い気がする。動かしてみようかと思っただけど、オッサンの言う通り、骨折でもしていたらと思うと、怖くて動かしたくない。

このままの状態がずっと続くのかってーの？

「オッサン、聞いてんの？」アタシは不安になった。

「聞いている。ま、君のことも考えてはいるが、オレも穴から抜け出せなくてどうしたもんかと考えてたところ。なーんにも出来ないしなあ……」

オッサンの困り顔が思い浮かんだ。「オッサン、ケガは？」「大丈夫」「あ、そう。ならいいけど」自力で這い上がれないほど深い穴ってー、早く埋めちゃえばいいのっていうか。アタシもオッサンも何て不幸。

「つまらない人生だった」

アタシは早くも諦めモードになった。「アタシ何で生まれてきたんだろ」そんなことを呟いた。アタシがどういう風に生きてどういう風になって、どういう女になろうとも。他人には関係ないしアタシも他人には興味ない、っていうか。無関心、っていうの？ いつからかそんな風になった。

「無関心な親からは無関心な子どもが育つんだよ。そりゃそうだね。君に思い出はあるかい？ 何が一番楽しかった？」オッサンがアタ

シに聞いてくる。「一番は……」一番、と聞かれても分からないじゃね？ とアタシは考えながら、自分の記憶のなかを辿った。

夏、海へ行っただけなア、親たちと、親戚もいたりして、賑やかだった。釣りもしたし、溺れかけてサーファーに助けられたことがあったじゃん。オトンは気ままに蛸釣って、アタシがそばで溺れてるっつーのに気がつきもしなかったって、後でオカンに怒られてた。秋、小学生だったっけ、運動会が終わった後だったと思うけど、ちょっといい感じじゃんって思ってた男の子に告白されたんじゃん。アタシ、すっごく嬉しくて舞い上がったけど、震災が起きて男の子はそのせいで転校しちゃったんじゃん。あれは悲しかったっけなア、ずっと泣いてたしィ…… あア、震災っていえば、ゴローの奴、被災地に行ってたんだっけ。

「アタシも被災地に行けばよかった」
オッサンの問いかけを無視して、アタシは思いを口に出した。「そうすれば、ちょっとは生きててよかったって思えんじゃん？」アタシのカレシは偉い奴で、3月11日に起こった大地震の時に支援団体ってーのに交じって北陸に行ったんだって。

もしアタシがその時に一緒にいたなら行ったかもしれないけどオ、あいにくアタシがゴローと知り合ったのはもつと後。夏前なのに真っ黒になって帰ってきました、なんて言っただけで笑ってた、それで惹かれたのかもしれないけど。『サンデマンドュー』っていうカフェでアタシら出会ったっけなア、つい最近のことだけだオ。

「地震か。オレもね、被災したんだけど、変な話、もしあれが無かったら、死んでいたのかもしれない」オッサンが奇妙なことを言い出した。

震災で死ぬんじゃないかって？ どういうことだ。

「あの時はね。仕事も家庭も上手くいかなくて、躍起になりかけていた時期だった。そんな自棄な時に震災だろう。皆が皆、協力し合

わなければ生きていけなくなった。ひとりで過ごしている時間より他人と共有している時間が主になってしまつて、でも、その時に過ごした時間の方が、『あーオレって今日も生きてんだなー』っていい気分で実感できたっていうかね。それまで躍起になってひとりで解決しようと、あーだのこーだのとカミサンや息子、上司や後輩たちにわめきちらしてたり偉そうになつていたオレ……馬鹿らしいっていうか……恥ずかしくなつたんだよ……」

オッサンはアタシに愚痴り出したけど、アタシは、どっかでオッサンに少し同感してる。

テレビの向こう側では必死な人がたくさんいるっていうのにさ。他人なんて関係ないなんて言つといて、でもアタシ何やってんの？ っつて、ちよつと思つてる。

震災が外国だつたらどう？ 日本じゃない行つたこともない国の話で、アタシこんな風に思った？ ゴローみたいに現地に行こうとした？

無関心って何処までで、どうなんだ、っっていうか。

アタシって何で生きてんのー？

アタシの叫びは誰の関心も向かない。ただ吠えてるだけ。生きたけりゃ生きなよ、っつてさえ言つてくれない。無関心、そんなのつてある？

素通りたくない毎日。アタシは今日、カレシとプールに行くはずだった。

こんな所で死ぬんじゃない。

アタシは、死にたくない。死ぬ実感がわかない。プール行きたい。ゴローに会いたい。

もつと先が分からない代わりに、目先のことだけとはにかく考えられるんじゃない？

「もっと早くに気がついてたら日常も違ったかもしれないけど」と
オッサンは言った。

「生きたいことはやりたいことがあるっていうことだし。助け出されたらいいね、君は」と、オッサンは続けた。

「オッサンしつかりしなよ。よく知らねーけどオ、今は死にたくないんだろ？」

アタシはハッキリと言ってやった。オッサンは無言で、それから返事した。「うん」

不思議じゃん。オッサンとアタシ、自分の話をお互いにぶつけてるだけなのに。

これで明日の見方が変わってる。死にたくなってる思うようになった。変じゃん、アタシたち。キョウユウ、って 不思議。

ところが、ってやつ。

「オッサン、アタシ眠い」

「おや」

「何だろ、すごく眠い……」体が言うことをきかない上に、眠気が襲ってきた。手を上げたいけど、力が入らない。どうなっていくんだ、このまま、アタシ。

「祈ってるよ。君が助かるように。……祈ってる」

アタシの隣、壁の向こう側になるんだろうけど、隣では、オッサンがアタシを励ましてくれた。

「アリガト、オッサン。っていうか、アタシ……」朦朧としてきた頭で、これだけはもう一度強く思っておこうと決めた。「死ぬ気ねー」

今は眠いから眠るだけっつーの。おやすみ。アタシは、目を閉じ

たつもりで、……閉じた。オッサン、アタシだけじゃなくて、アタシも助かるように、アタシも祈ってる。お互いがお互いのことを思えるって……よくね？

おやすみ……

……アタシ、夢を見た。汚いコート着たみすばらしい格好の見たこともないオッサンが、倒れた家屋のなかからオレンジ色の服着た救助隊みたいな人たちに助け出されている所。色が鮮明についている夢だったんじゃない。美しい、ってーの？ 銀杏の散った並木があって、救助隊の人たちの口から薄く息が白く吐かれて。秋の夕暮れでキラキラ輝いていて、絵に描いたように幻想的じゃん？ 何でか美化されてんじゃない？

オッサンの綺麗な夢が、アタシにうつったのかなっていうのか。ともかくオッサン、何でこんな夢見せてんのか分からないけど、元氣出せよな……

アタシは目を覚ますけど、白い世界にすぐには馴染めなかった。目を開けると建物の天井があつて、そのまま横を見ても、白っぽい。それから鼻につく薬品みたいなニオイ。後で来た看護師のお姉さんに教えられる前に、ここが病室だつてことが自分で分かった、つてワケ。病院じゃん。

記憶は何ともなくね？ 覚えてる……アタシ、穴に落ちてたんだ。

「先生を呼んでいますからね。落ち着いてね。ここは病院だから安心して。アナタ、助け出されて3日間眠っていたんだから」

アタシが寝ているベッドの横で看護士のお姉さんは、微笑んでいた。

「あのオ」

「ん？」

「アタシの隣にいたオッサンは？ どうなったの？」

アタシがそう聞いたら、お姉さんは困った顔をしてんじゅんか。だから、あれ？、ってなった。

「隣って？ オッサンって誰のことかしら」

「だからー、アタシが落ちてた穴の隣で、アタシと同じように穴に落ちてた惨めなオッサン」

アタシ、ちゃんと説明したんじゅん。だけとお姉さんは、ますます困惑した顔でアタシを見てる……。

「何のことかしら……助け出されたのは、アナタひとりだったけど？」

そう言われて今度は、アタシが混乱したんじゅん。あれ？ どうなってんの？

アタシは幸いにも骨折だけで済んで、入院していたってんじゅん。仕事先から、アタシが目を覚ましたってんで慌てて飛んできたっぽいオカンが詳しく教えてくれたけど。アタシは、携帯電話を穴に落ちる前に何処かで落としてみたいで、着信音が鳴り響いて気がついてくれた人がいたらしいってさア。ラッキーってやつ。

でもまア、気がついてくれた人ってのが近所の子ども（ガキンちよ）で、携帯に電話かけてくれた人ってのがカレシ。アタシが待ち合わせに来ないから、怒って心配してかけたんだってえ。あー、よかった。アタシは助かった。

何処でどう転ぶか分かんないけど、アタシは助かった。感謝するけどオ、……オッサンは？

オッサンの行方は不明。オッサン、アンタ何処にいんだよ……っ

ていうか……。

もしかして全部、夢だったワケえ？

・
・
・

数日後、朝刊の紙面には、次のような見出しで記事が書かれていた。

『山中にて白骨化された遺体、発見か』

アタシが退院するまでに穴を調査してくれたらしく、こうしてオツサンは、発見された。

オツサンがアタシに見せてくれた綺麗な『夢』は、本当に綺麗だったのかなア。アタシには、絶対に掘り返してはならない『穴』のように思えて仕方がない。カミサンと息子がいるって言った。しかも夢、あれは秋？ オツサンが遭った震災って、いつのこと？

難しいこと、分かんね。知イらない、アタシ。そこ無関心でいいんじゃない？

アリガト、オツサン。アタシ、ゴローと幸せになるわ。

《END》

(後書き)

平成16年10月23日、新潟県中越地震の発生、つと。

本作品は、小説家になろう『夏のホラー2011』夏の夜には怪談を『企画参加作品です。

<http://horror2011.hinaproject.com/pc/>

「読了ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6111v/>

アナアナ。

2011年8月9日06時31分発行